



横山大観(寛政13)北条景時(1817)の「大観」(東京国立近代美術館蔵)複製(1971年) 横山大観(寛政13)北条景時(1817)の「大観」(東京国立近代美術館蔵)複製(1971年) 横山大観(寛政13)北条景時(1817)の「大観」(東京国立近代美術館蔵)複製(1971年)

〈報道関係のお問い合わせ〉
 『横山大観展』広報事務局 担当：池袋・岩川
 〒106-8611 東京都港区西麻布2-25-18 麻布パレスビル
 Tel:03-3406-3418 Fax:03-3499-0958
 E-mail:taikan2013@yppcpr.com



師・岡倉天心、そして紫紅、未醒、芋銭、溪仙。
 彼らとの出会いが、巨匠「大観」を生んだ。

2013.10.5 → 11.24
 sat sun 横浜美術館
 YOKOHAMA MUSEUM OF ART

岡倉天心生誕150年・没後100年記念／「大観」創作125周年／朝日新聞創刊135周年

横山大観展

良き師、良き友

The Life and Art of Yokoyama Taikan: His Mentor, Friends and Inspirations



横山大観(寛政13)北条景時(1817)の「大観」(東京国立近代美術館蔵)複製(1971年)



【電車】みなとみらい線(横浜東横線直通)「みなとみらい駅」3番出口から徒歩3分
 1分乗り換え(徒歩)「新木町駅」から「徒歩(歩道)」を利用、徒歩10分
 【車】横浜東横線から日本丸方面へ入る。または横浜東横線から新横浜駅までを
 右折してMM21地区へ入り、高層部へ。横浜駅からは高層部MM21地区入
 口を渡って高層部へ、いざれも3～5分(徒歩)みなとみらい出口を利用
 できます。*有料駐車場(10:00～21:00、収容台数168台)高層部の30分
 は500円、以降30分ごとと250円 *月曜祭、運行高層部の駐車場および
 高層部2階の駐車場はございません。

〒220-0012 横浜西区みなとみらい3-4-1
 Tel:045-221-0300 Fax:045-221-0317 http://www.yet.an.jp/yma/

横浜美術館





横山大観

1868(明治元)年～1958(昭和33)年

近代日本画壇を代表する巨匠・横山大観は、良き師・同会天心から薫陶をうけ、大正期に共に歩んだ良き友4人、今村紫紅、小杉未醒(放庵)、小川宇越、富田漢仙との交流から、作風を飛躍的に発展させました。

天心は横浜生まれの思想家で、大観は天心が創設に関わった東京美術学校に第一期生として入学、天心が同校長職を退かれた際には、師の目指す理想に共鳴し、日本美術院の創立に参画、新たな絵画の創出に邁進しました。

大正2年に天心が没すると、大観は日本美術院再興の先頭に立ちます。制作においては明確な輪郭を持たせないで描くことで悪評を受けた「朦朧体」を脱し、東洋意

味の水墨表現、大胆な色彩表現や構図、形態のデフォルメなどに取り組み、のびやかな明るさをもつ作品を生み出しました。その背景には、革新的な描法や構図を示した紫紅、線の片側をぼかして物のボリューム感を出す「片ぼかし」の技法をもたらした未醒、陽気な気分や飄逸さをたたえて特有の自然観を表す宇越、南画的傾向と裝飾性を融合させた漢仙、これら個性豊かな画家たちとの交流があったのです。4人は制作だけでなく、一緒に旅行し、酒を酌み交わし、語らう仲間だったのです。

本展では、彼ら「良き師」「良き友」との関わりを振り返りながら、約120点の作品で明治から昭和初期までの大観芸術の魅力に迫ります。



見どころ

本展は、大観が、水墨画における筆法や彩色の工夫、構図の妙、主題の選択やその新たな解釈など、画題、構成、技法とさまざまな挑戦をしながら、モダンで、伸びやかな作品を生み出した大正期に焦点を当て、大観がそれらを生み出した背景にある、個性豊かな画家「良き友」たちとの交流に着目しました。今村紫紅、小杉未醒、小川宇越、富田漢仙、この四人の盟友との親交と造形的な影響関係を探りながら、やがて円熟期に至る大観の画業を振り返ります。

大観の名作を、天心の直接の影響下であった時期と、天心没後、盟友らとの交流盛んな時期とを対照してご覧いただけるのは、本展の魅力でしょう。また、大観が愛蔵した盟友の作品や、大観が手元に置いた天心の書なども本展の見どころの一つです。

開会天心生誕150年・没後100年記念／「演劇」創刊125周年／朝日新聞創刊135周年

横山大観展 良き師、良き友

The Life and Art of Yokoyama Taikan: His Mentor, Friends and Inspirations

開催概要

会 期 = 2013(平成25)年10月5日(土)～11月24日(日)

前期:10月5日(土)～10月30日(水)

後期:11月1日(金)～11月24日(日)

*日・夜別での展示替えのほか、一部展覧期間が異なる作品がございます。

会 場 = 横浜美術館

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1

開館時間 = 10:00～18:00(入館は17:30まで)

休 館 日 = 木曜日

主 催 = 横浜美術館、朝日新聞社、神奈川新聞社、tvk(テレビ神奈川)

後 援 = 横浜市、NHK横浜放送局

協 賛 = 大仲社

協 力 = 公益財団法人 横山大観記念館、國華社、みなとみらい館、

横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、首都高速道路株式会社

観 覧 料 = 一般1,400円(1,200円/1,300円)。

大生・高校生1,100円(900円/1,000円)。

中学生500円(300円/400円)

(*)内は前売/団体 *前売券は9月2日(月)～10月4日(金)販売 *小学生以下無料 *毎週土曜日高校生以下無料(中学生は、生徒半額) *障がい者手帳をお持ちの方と介護の方1名は無料 *団体料金は有料20名以上(会場でのみ販売、要予約連絡)tel:045-221-0300) *本展覧会当日に限り横浜美術館コレクション展もご覧いただけます *リポーター要約:観覧券のみの横浜美術館会館内有料観覧券をご購入いただくも、団体料までご覧いただけます(ご観覧された展覧会の開館日から1年間、1名様1回限り有効) 前売券は、横浜美術館(ニュー・ジャムショップ)、公式サイト上のオンラインチケット、コレクションチケット(034-3533)、イープラス、チケットぴあ(Pコード:765-773)、CNプレイガイド、セゾンレインズ(セゾンコード:034-3533)、JTB(店舗・電話のみ、JTBエンタメチケットデスク)tel:03-70-010311)などで販売(チケット購入時に手数料がかかるサービスもありますので、詳細は各プレイガイドの観覧ガイドをご覧ください。)

【特別先行前売券】先行ペア前売券(ペア2,000円)

7月1日(月)～9月1日(日) 期間限定発売

*1人1人前売券2枚のセットです。詳細は公式サイトをご参照ください。

お問い合わせ = 03-5777-8600(ハローダイヤル)

公式サイト = <http://www.taikan2013.jp>

第1章

良き師との出会い：大観と天心

1) 天心との出会い

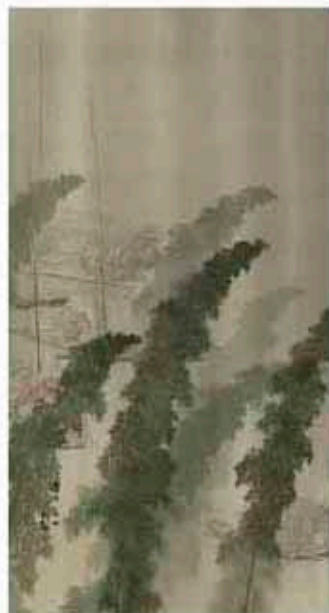
2) 日本美術の理想に向けて

明治元年、水戸藩士の家に生まれた大観は、官立で新設される東京美術学校（現・東京藝術大学）を知って画家を志し、第一期生となり生涯の師、岡倉天心と出会います。天心は、日本美術の優秀性を説いて大観らに伝統に立脚した新美術の創造を導きました。

大観は、明治31年、東京美術学校の校長職を退かれた「良き師」天心に逢って職を辞し、絵画研究を旨とする大学院の性格を持たせた日本美術院の創設に関わりました。大観は、狩野派以来の線描重視から離れ、没線彩色、すなわち輪郭線を強調せず主として色彩に

よって、従来にはない空間表現を模索しますが、それらは「朦朧体」と評され、国内では評価を得られませんでした。明治39年、天心が日本美術院の茨城県五浦への移転を決めると、大観は一家をあげて五浦に転居し、絵が売れない貧苦を味わいながらも、初志を貫いて研鑽を続けます。

明治40年代に入ると、大観は文展出品作《流燈》などに見られるように朦朧体を脱した絵画世界を充実させていきました。



横山大観《瀟湘八景》より

左「瀟湘夜雨」（複製展示）、右「瀟湘暈雨」（複製展示）1912（大正元年）、
 紙本着色・八幅対、各114.4×60.2cm、東京国立博物館蔵 重要文化財 Tish Image Archive
 瀟湘八景とは、中国湖南省地方の八つの景勝。古来より描かれてきた瀟湘八景図とは異なり、大観は中国旅行で得た印象に基づき、溟濛な瀟湘地域の光と空気が、季節や時間によって変化していく様を見事に描きだした。



岡倉天心

1863（文久2）年～1913（大正2）年

権井藩横濱商館の下級藩士の家に生まれる。東京美術学校の設立に貢献し、日本美術院を創設した。文明評論として英文による「茶の本」「東洋の理想」「日本の賞讃」を著した思想家であり、近代日本における美学・美術史研究の開拓者である。 写真提供：茨城県天心記念三浦美術館



「國華」創刊号 表紙 1889（明治22）年 朝日新聞社蔵
 岡倉天心らによって創刊され、以来百年以上の歴史を歩み、世界的に高い評価を得ている日本・東洋古美術研究誌



横山大観《屈原》（10月5日～10月16日展示）

1898（明治31）年、紙本着色・額、132.7×289.7cm、鎌倉神社蔵
 屈原は中国戦国時代の詩人、楚国の政治家であったが、事実無報の諷刺により流放の憂き目にあい川に身を投げて命を絶った。大観はこの詩人に、俳文書によって東京美術学校校長を辞職となった天心の姿を重ねていた。

第2章

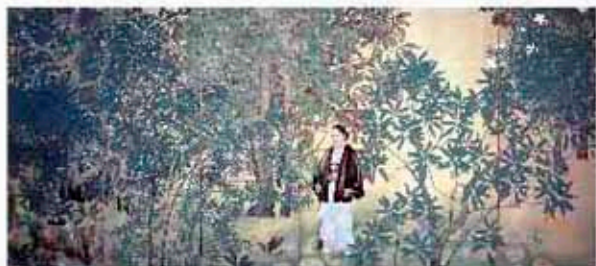
良き友、紫紅、未醒(放蕪)、芋銭、溪仙 大正期のさらなる挑戦

- 1) 水墨表現と色彩
- 2) 構図の革新とデフォルメ
- 3) 新たな主題の挑戦

大正2年に天心が没すると、大観は事実上休止していた日本美術院を大正3年に再開しました。紫紅は再開の発起人に加わり、大観を乗り越えようと、彩色や構図、描法で斬新な工夫を示し、大らかな作風で大観の目を引きました。未醒は大観と親しくなって、院の洋画部を主宰します。未醒は、再開前年となる大正2年の欧州旅行で池大雅の画帖に触発され、以後、日本画の題材で中国の空想的な人物などを描き、特異な作風で大観を刺激しました。芋銭は、襦を題材にした墨画(肉案)が大観が認めた縁で院同人となり、東洋的な精

神性を特有の自然観で表した主に墨画淡彩の作品で個性を発揮しました。また溪仙は、近代的感覚が盛り込まれた南画風の《沈黙・菩薩》を大観に評価されました。大観は、自在でとらわれない発想で描く溪仙の才能を慕い、彼の絵を愛蔵しました。

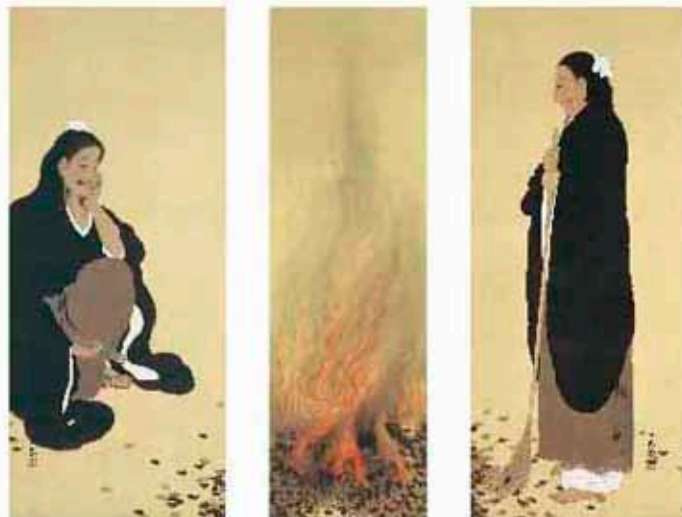
こうして大観は、年齢や立場の上下に関係なく、才能を認めた彼らと交流し、影響し合いながら、水墨の新たな表現や革新的な構図、色彩の工夫、また対象をデフォルメする、主題を新たに解釈するなど、さらなる高みを目指し挑戦を続けました。



横山大観《千ノ與四郎》(後期展示)

1918(大正7)年、絹本着色・六曲一屏、各166.5×372.0cm、一般財団法人野間文化財団蔵

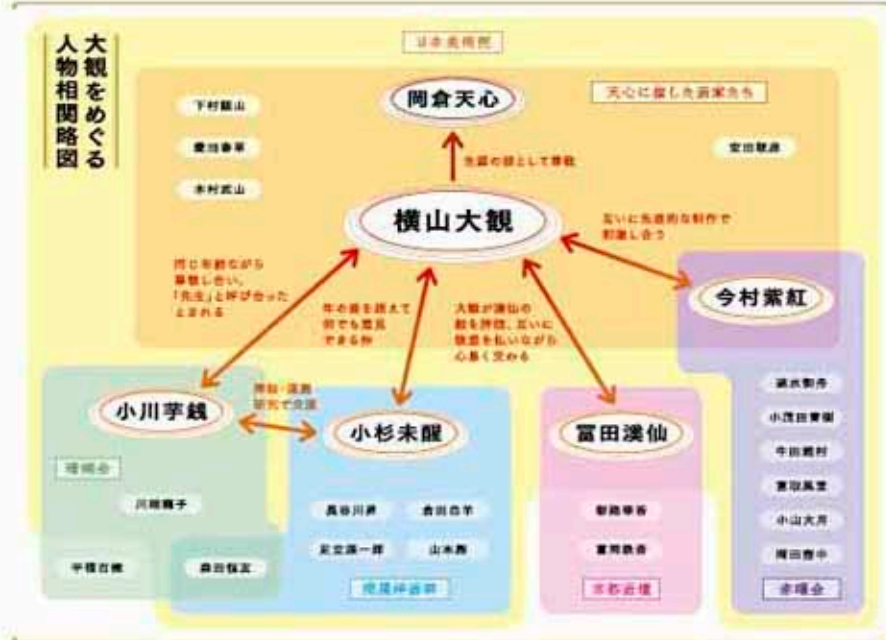
茶室・千利休の15歳の時の逸話を描く、閑雅な庭の一角に庭掃を手にしたたずむ人物が、利休と名を交える前の與四郎である。大観は京都の桂離宮や大徳寺などに赴き研究し、茶室や庭の描写などを苦心の末仕上げた。



横山大観《焚火》(後期展示)

1915(大正4)年、絹本着色・三幅対、左右:各135.8×56.7cm、中央:135.8×41.6cm、東京国立近代美術館蔵

唐時代の僧、寒山拾得を描く。寒山は経巻を、拾得は箆を持つことで古くから表されてきた。三幅の中央に焚火のみを記した構成と、輪郭線を用いず墨で平面的に表現された人物の髪や衣が特徴的な作品である。



第2章

小川芋銭

1868(明治元年)年～
1938(昭和13)年

《肉案》

1917(大正4)年、紙本墨画・軸、
137.0×94.0cm、東京国立近代美術館蔵

大観と同じ明治元年生まれの芋銭は、初め本多静吉郎の画塾で洋画を学んだが、次第に日本画へと傾倒。幼少より慣れ親しんだ茨城真牛久留の自然や、河童や蟹など滑稽に想われる生き物の世界、また神の教えに惹かれた面影を墨や淡彩によって自由闊達に描いた。本作は第三回定期会展に出品中、大観が興味を示し、日本美術院同人に推薦されるきっかけとなった作品。肉案との会話から悟りを開いた僧・靈山の話を描いている。



今村紫紅

1880(明治13)年～
1916(大正5)年

《熱國之巻》より「朝之巻」(部分)

(前期展示)

1914(大正3)年、紙本着色・巻子、朝之巻 45.7×954.5cm、
夕之巻 45.7×899.0cm、東京国立博物館蔵、重要文化財

横浜生まれの紫紅は、松本模範の安福堂画塾に入門して粉本の模写に励み、また安田歌麿と「紅兎会」を結成して、新しい歴史画の創出を目指した。五通で天心の知恵を神、のちに大観とともに日本美術院の再興に尽力する。淋病や南蛮そして西洋の風景表現を柔軟に学び、おほかたで色形豊かな作風によって風景画壇にも新風を吹き込んだ。本作は大正3年のインド旅行の成果を、鮮麗な色彩と点描で表現した紫紅の最高傑作のひとつである。



TNM Image Archives



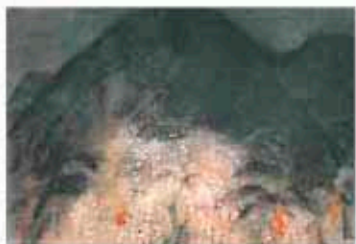
小杉未醒(放庵)

1881(明治14)年～
1964(昭和39)年

《列仙屏風》左隻

1915(大正4)年、紙本着色・六巻一屏、
各187.3×289.0cm、小杉放庵記念日展美術館蔵

文展で最高賞を得るなど洋画家として活躍していた未醒は、パリで見た地大箱の画帖に「押るべき道」を見出し、帰国後は日本画に傾倒。昭和期には放庵と号して日本画を描いた。大観とは自由美術研究所の設立構想に始まり、技法上の影響関係や多くの合作制作など生涯を通じて深く交わった。本画は唐の漢子・騎鯨が玉鳥に助けられながら、玉の杵臼で百日閑仙薬を焼き練ったことで、美しい顔と結ばれ仙人となる話を描いている。



富田溪仙

1879(明治12)年～
1936(昭和11)年

《祇園夜桜》

1915(大正4)年、紙本着色・軸、
48.3×71.0cm、横山太郎記念館蔵

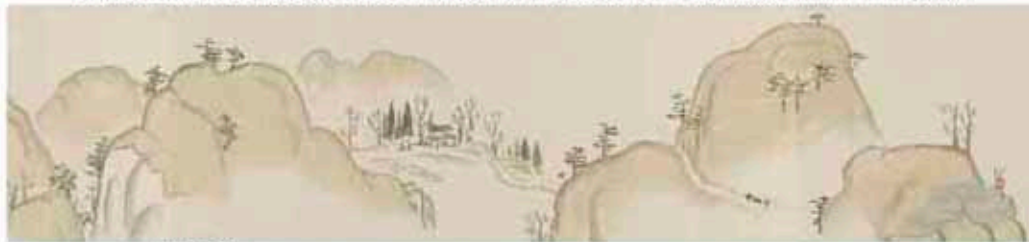
奔放な筆致と鮮やかな色彩で、新南画を描く個性作家の一人として評価された溪仙。明治45年の第六回文展入選作《輪船》で大観に認められ、院長の同人に推挙された。誘われた多くの書簡類からは、二人が常日頃から親しく交遊していたことが窺える。本作は京都の丹山公園の枝垂れ桜を描いたもので、大正10年の日本美術院米田運送展に出品され、大観が愛蔵するところとなった。大観の名作《夜桜》はこの作品に想を得て描いたとされる。



東海道 五十三次 合作絵巻

これは、大正4年に、大観、下村綱山、西大宮と吾手の黒紅、津田家の未醒とらう、日本美術院幹部4人と、表裏御中内蔵次郎を加えた一行が、汽車に乗らず、人力車や馬車などで東海道を旅して、現地で写生しながら各場面を描き進んだ合作で、9巻に及ぶ大観寺で文出師彼らの旅は、著名な画家の多岐多岐的な筆遣中として、目を追って雲間で消滅され、人々を驚かすまで描いたよ、です。また本作では、大観の六片ばかりが写像けられます。『片ばかり』とは、強い筆勢で描く狩野派の筆法と異なり、強い筆勢の筆法、内側に集って物の重さを表すところに、素れで大らかな味わいが生まれるもので、無暗で試みていた未醒によってもたらされたこととされています。また、この絵巻は、日本美術院の資金獲得を目的に3組制作されましたが、本展では横山の三鷹原太郎旧蔵の1組から第5巻と第7巻を展示します。

横山大観、下村綱山、今村紫紅、小杉未醒《東海道五十三次合作絵巻》第5巻 1915(大正4)年、紙本着色・巻子、51.2×893.0cm 東京国立近代美術館蔵 TNM Image Archives

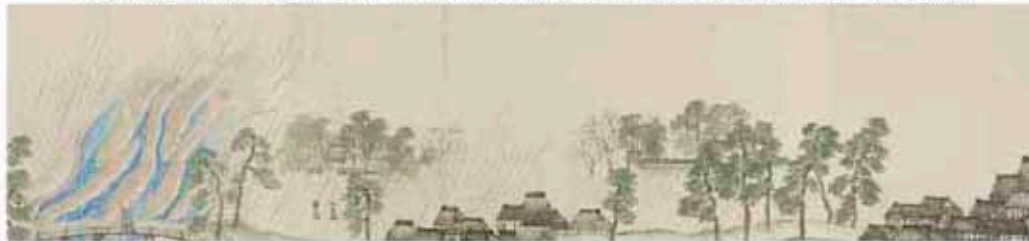


小杉未醒画「自雲・小夜中山」(部分)



横山大観画「藤川」(部分)

横山大観、下村綱山、今村紫紅、小杉未醒《東海道五十三次合作絵巻》第7巻 1915(大正4)年、紙本着色・巻子、51.2×1088.0cm 東京国立近代美術館蔵 TNM Image Archives



横山大観画「市輪船・橋渡」(部分)



今村紫紅画「葛巻」(部分)

●会釈中、場面替えがあります。

第3章

円熟期に至る

明治期からの放線彩色は、濃潤な空気感や光の様子を描こうとする挑戦でしたが、それは、大正8年の《塔中塔外雨十願》シリーズや、昭和2年の《雲霞らぐ》などに結実しました。また、昭和4年の《夜桜》は、華やかな装飾性と堂々たる風格を併せ持ち、大観が会得した画技の集大成と云える名作です。昭和11年の《野の花》では花鳥画と風俗人物画を融合させた新たな画境を示します。

天心の教えから出発し、日本における自主独創を理想として、芸術の無限の広がりを目指す姿勢を買った大観の芸術は、いよいよ円熟味を増していきました。



横山大観《野の花》
(前期展示)

1926（昭和11）年、紙本着色・二曲一折、
各159.0×173.0cm、法政大学蔵

五福での厳しい修行時代に目にし、いつか描いてみたいと思っていた野に咲き乱れる草花と、京都時代の思い出深い「人間の野の花としての大原女」を組み合わせた作品。大原女の姿は、大観の妻・静子をモデルに描いたという。



横山大観《夜桜》（後期展示）

1929（昭和4）年、紙本着色・六曲一折、各177.5×376.8cm、大倉集古館蔵

試行錯誤の上一度完成させたものの、納めが行かず上から紙を張り替え、もう一度描き直したと伝えられる大観自身の作品、運仙の《夜桜夜桜》に想を得たとされ、昭和5年にローマで開催された日本美術展に出品した。